

実態調査（その2）の結果

地震発生時の児童生徒の在校状況と養護教諭としての対応

避難所開設

避難所の開設の場所・期間

避難所開設時の保健室の機能

支援養護教諭の状況

一校内に複数校が所在している場合の保健室経営

保健室の形態

養護教諭の巡回状況

経営上の問題点

児童生徒の様子で気になること

I期 3月11日～始業式前

II期 始業式～夏休み前

III期 夏休み期間～調査記入日

震災をとおして養護教諭として感じたことや気付いたこと

2-1 地震発生時の学校における児童生徒の在校状況と養護教諭としての対応

2-1-1 児童生徒の在校状況

地震発生時の学校における児童生徒の在校状況は、小中学校および高等学校では70%以上の学校で在籍していた。特に多かったのは、北部栗原教育事務所、仙台市教育委員会、南三陸教育事務所で90%以上の学校で児童生徒が在籍していた。特別支援学校では65.2%であった。

小学校と中学校とで在籍状況を比較すると、小学校ではほぼ全地区で90%前後の学校に児童が在籍しており、中学校では地区によって大きな差がみられた。北部栗原教育事務所、南三陸教育事務所では全ての中学校に生徒が在籍しており、大河原教育事務所、東部登米教育事務所では生徒が在籍していた学校はわずか30%以下であった。これは卒業式当日ですでに生徒が下校していたためであった。

図2-1(1) 地震発生時の児童生徒の在校状況(教育事務所別)

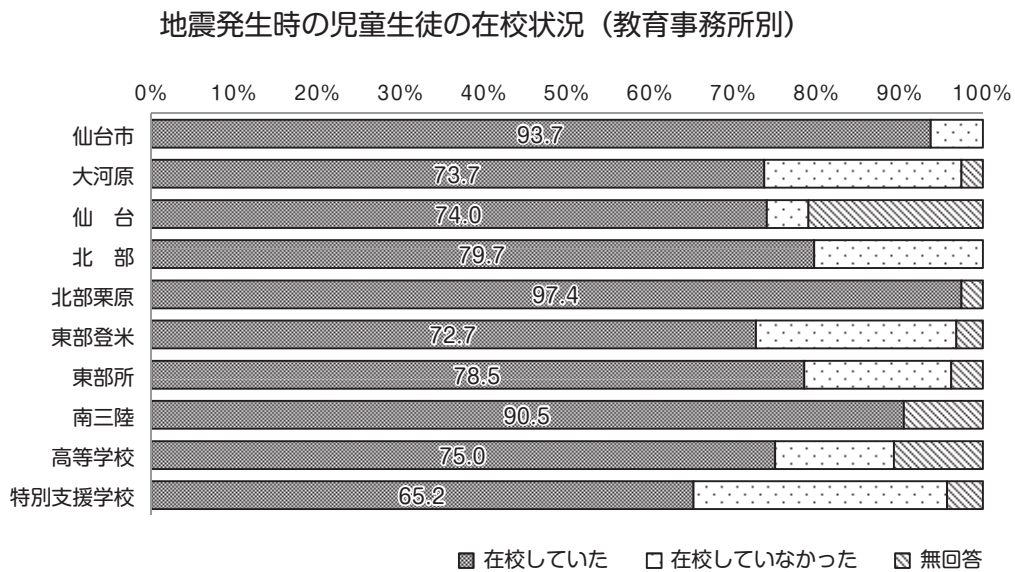


図2-1(2) 地震発生時の児童生徒の在校状況(小中学校別)

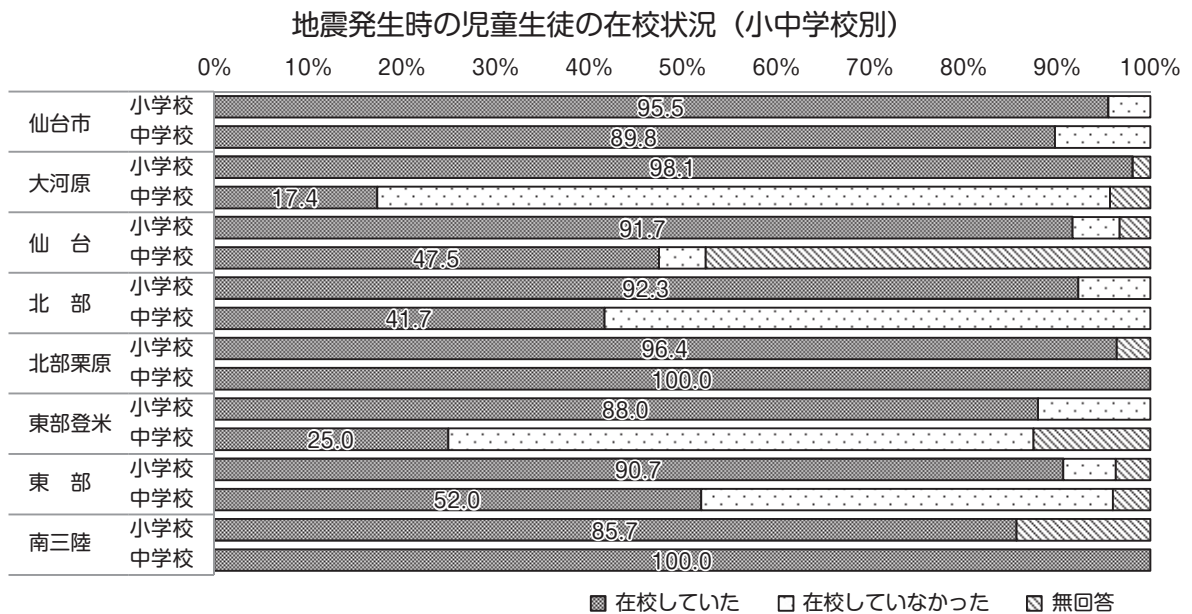


図2-1(1)、図2-1(2)は宮城大学看護学部看護学科4年 平山美穂子氏の統計を参考に作成した

2-1-2 養護教諭としての対応

1 回答内容の分類

ここでは、地震発生時、児童生徒がいた学校の養護教諭が震災直後にどのような対応をしたかを質問した。このことについて545人から回答を得た。

アンケートの質問事項に「健康観察」と「応急処置」の用語を例として掲載したことから、回答された内容は、「健康観察」というように用語のみの回答が多かった。しかし、次の例のように、養護教諭の実践の詳細、震災の状況などが分かりやすく記入されたものも多かった。（ ）は地区と学校種

〈記入例〉「校舎から校庭に避難後は、児童の健康観察を中心に対応しました。大きなケガや病人がいなかったので保護者に引き渡しをするまで、他の職員と確認しました。小学校と幼稚園、市民センターが入っている〇〇ビルのため、幼稚園児と市民センター利用の方、近隣のビルの方達、仙台駅の指示で通勤・旅行の方達が狭い校庭に押しかけ、相当の混乱でした。」(仙台市 小)

そこで、これらの記入内容を、養護教諭が東日本大震災直後に行った実践を意味が損なわれないようにコード化し分類した。作業終了時のコード総数は、1,552であった。

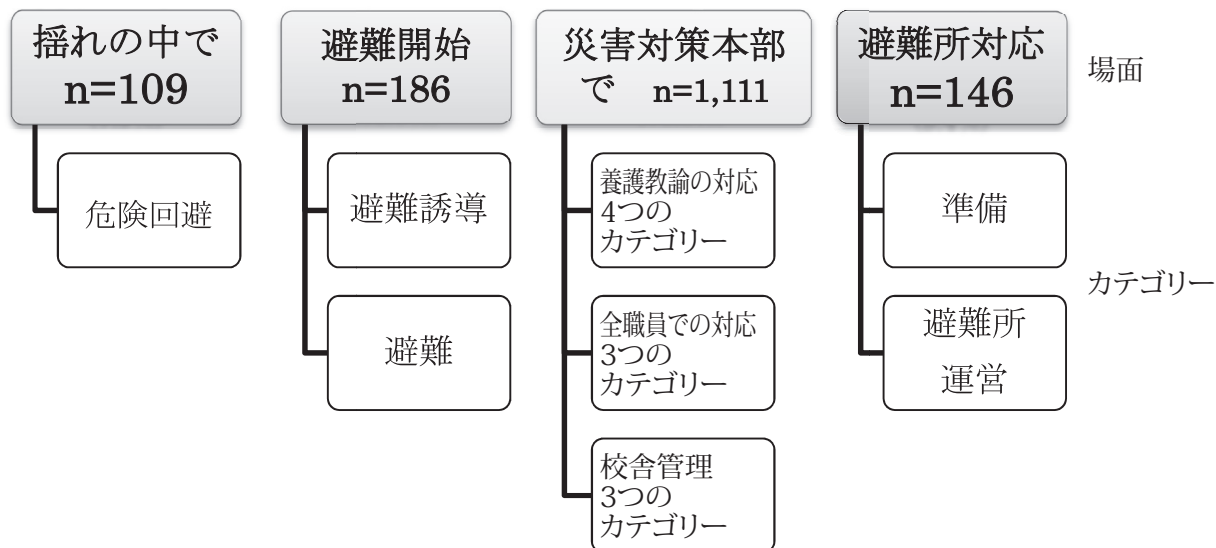
上記の記入例では、「児童の健康観察」、「他の職員と引き渡しを確認した」をコードとした。

1,552のコードは、「揺れの中で」の様子や「避難開始」の様子、「災害対策本部で」の実際、そして「避難所開設」に関する4つの場面に分けることができた。

※多くの先生たちが本部と記入していたが、災害時における本部であることを分かるように災害対策本部と表記した。

養護教諭が取り組んだ震災直後の実践の広さがこの結果につながっていたとも言える。また、このようにして集まったコードの中には量の面では少なくとも、今後の災害に向けた提言ともなる大変貴重な記録があった。

図 東日本大震災直後の養護教諭の実践場面とコード数



避難後に「災害対策本部」で行った実践が、一番多く記入されていた。この中でも、一番多くのコードを集めたのが、養護教諭の対応としての【健康観察】のカテゴリーで、330のコードが集まっていた。養護教諭が大震災直後に、児童生徒及び教師の心と体の変化を早期に発見し対応しようとしていた姿が多かったことが分かる。養護教諭の対応のカテゴリーには他に【本部への持ち出し】126コード、【身体面の対応】146コード、【心のケア】164コードがあった。(112ページ参照)